

上演 10

2024年8月1日5校目  
関東ブロック

目黒日本大学中学校高等学校

「ごめんね、ごめんで！」

第48回全国高等学校総合文化祭  
第70回全国高等学校演劇大会

講評文

生徒講評委員会 担当委員

島根県立三刀屋高等学校

陶山桔平

高校教師である主人公の萩本先生は、悩みを抱えた生徒たちと第5面談室、通称5面で向き合ってきた。しかし定年間近、認知症を患い記憶がなくなっていく。そんな先生の教員人生と高校生たちの葛藤が、昭和・平成・令和の時代とともに描かれた作品だった。時代が移り変わるにつれて悩み事や人の有り様なども変化していく。しかし、先生の生徒を思う心は変わることはない。彼らに寄り添い、救いたいと思ひ奮起する姿から、逃げずに向き合うことが大切だと考えさせられた。

「人生はな、逆風が強いから高く飛べるんだ。」というセリフがこの劇には多用されていた。人は問題に立ち向かう時に、逃げるのではなくそのピンチをチャンスに変え、成長することができる。そして、その積み重ねが人生というドラマになるのではないか。だが、そんな萩本先生も一度、生徒を救えなかった後悔からやけくそになり、生徒に厳しく接するようになる。そんな彼を救ったのは同僚の坂本だ。この2人の対話からともに支え合える仲間のありがたみを教えられた。

最後のダンスシーンでは今まで関わってきた全ての人たちが「先生のことを忘れない」というメッセージを発しているかのように感じられ、先生が救った人たちからの感謝の気持ちで包まれ、温かい気持ちになれた。

ハイテンポで進むが、観客を置いていくことなく、おもしろさとメッセージ性を共存させる舞台に引き込まれた。また演出面では、時代を象徴する出来事を羅列し、変わって行くものを表現しながら、第5面談室や萩本先生の生徒を思う変わらないものを対比的に表現することから、私たちはその変化しないものに救われてきたのだということを実感できた。愛があったからこそ先生は厳しくしたということに当時の生徒は気づかなかったが、時間が経つとありがたみを感じて差し入れをしたのではないだろうか。講評委員の中には、今まで怖くて嫌いだった先生が自分のために怒ってくれていたことに改めて気づき、これからは愛を受け止め、感謝を伝えられるように生きていきたい、という声があがった。

最後まで萩本先生の愛を感じられ、自分に向き合ってくれる人や、夢を追いかけ続けることの重要性を再確認させてくれる作品だった。

